

令和6年4月18日（木）

本日ここに、宇美町戦没者四百二十三柱の御霊をお迎えして、ご遺族ならびに来賓各位のご列席を賜り、令和6年度合同慰霊祭を執り行うにあたり、謹んで慰霊の言葉を捧げます。

祖国の安泰を願い、愛する家族を案じつつ、身をもって難にあたり、尊い一命を捧げられた戦没者の最期を思う時、今なお悲痛の念が胸に迫ってまいります。

少し前の映画になりますが、皆さんは、「硫黄島からの手紙」という映画をご存知でしょうか。

太平洋戦争の末期に、小笠原諸島の硫黄島で日本軍とアメリカ軍の間で繰り広げられた最も悲劇的といわれる戦いを描いた映画です。この硫黄島の戦いで日本軍が20,933名の守備兵力のうち20,129名が戦死し、アメリカ軍は6,821名が戦死、戦傷者は21,865名にのぼったと言われています。

映画は2006年の硫黄島で、地中から発見された数百通もの手紙の場面から始まります。それは61年前、この島で戦った兵士たちが、家族に宛てて書き残したものでした。届くことのなかった手紙に、彼らは何を託したのでしょうか。

戦況が悪化の一途をたどる1944年（昭和19年）6月、渡辺謙さん演じる指揮官、陸軍中將の栗林忠道くりばやしただみちが硫黄島に降り立ちます。栗林中將はアメリカ留学の経験を持つことからアメリカとの戦いの厳しさを誰よりも知り尽くしていた人でした。

着任早々、長年の場当たり的な作戦を変更し、部下に対する理不尽な体罰をも戒めた栗林中將に、兵士たちは驚きの目を向けます。今までの指揮官とまったく違う栗林中將との出会いは、愛する妻とまだ見ぬ子どもを残して召集され、硫黄島での日々に絶望を感じていたアイドルグループ「嵐」の二宮和也にのみやかずなりさんが演じる西郷二等兵に新たな希望を抱かせます。

そんな中、1945年（昭和20年）2月19日、ついにアメリカ軍が上陸を開始します。その圧倒的な兵力の前に5日で終わるだろうと言われた硫黄島の戦いは、36日間にもおよぶ歴史的な激戦となりました。死こそが名誉とされる戦争の真っ只中であって、栗林中將は兵士たちに「死ぬな」と命じました。「最後の最後まで生き延びて、本土にいる家族のために、一日でも長くこの島を守り抜け」と。

栗林中將に反発し、軍人らしく玉砕を貫こうとする者や、憲兵隊のエリートから一転、過酷な戦地へと送り込まれた者、そして、まだ見ぬ我が子を胸に抱くため、どんなことをしても生きて帰ると妻に誓った西郷二等兵、そして彼らを率い

た栗林中将もまた、軍人である前に、家族思いの夫であり、子煩悩な父であったことが手紙の文面から伝わってきます。

当時、多くの若者が兵士として召集され、その多くが尊い命を落としました。戦争で国のために殉じることが美德とされた時代でしたが、兵士の心の奥底には、国のために戦うと言うよりも、これまで自分を育ててくれた両親や愛する妻や子どもを守りたいという気持ちが死を覚悟させ、戦地へ向かわせたのではないのでしょうか。わずか79年前の出来事です。

世界に目を向ければ、ロシアによるウクライナ侵攻は終わりが見えず、つい先日は、イランがイスラエルに対して、数百基のドローンやミサイルを使った攻撃を仕掛けるなど緊迫の度を増しております。東アジアでは、台頭する中国が軍事力を拡大し続け、北朝鮮は核実験や弾道ミサイルの発射を繰り返しています。

なぜ人間は、このような過ちを繰り返すのでしょうか。戦争は、一人一人の自由を奪い、幸福の追求を阻むものです。

平和で豊かな今日の繁栄も、戦争の悲惨さとそこには尊い犠牲があったことを次の世代に語り継ぎ、世界の恒久平和を確立することが、私達に課せられた使命であると改めて感じております。

結びになりますが、戦没者の方々の御霊（みたま）がとこしえに安らかならんことをお祈りし、ご遺族の皆様のご多幸を心より祈念申し上げ、慰霊の言葉といたします。

令和6年4月18日 宇美町長 安川 茂伸